

主の回復における唯一の働き

(土曜日——午後の部)

メッセージ 9

主の回復における唯一の働きの究極的完成——新エルサレム

聖書：啓 3:12, 21:2, 9-23

- I. 主の回復における唯一の働きは、新エルサレム、すなわち神のエコノミーの究極の目標を成し遂げることで—啓 21:10-11：
- A. 召会の墮落はおもに、この事実のゆえです。すなわち、ほとんどすべてのクリスチャンの働き人はそらされて、新エルサレム以外のものを彼らの目標としています。
- B. わたしたちはただ一つの働きを行なうべきです。それは、神の選ばれた人を新エルサレムの中の人とすることです—3:12。
- II. 新エルサレムは信者たちの建造の究極的な完成です。彼らは神格においてではなく、命、性質、構成、表現において神となるようにされました。ですから、信者たちが命と性質において神となることと、新エルサレムを生み出すことには、内在的な関係があります—21:2, 3:12：
- A. 新エルサレムは、神が人と成ることと、人が神格においてではなく命と性質において神となることと、神と人が共にミングリングされて一つの実体となることと関係があります—ヨハネ 1:12-14, 14:20, 15:5 前半, 啓 21:3, 10-11。
- B. 神はキリストの中で人と成りました。それは人を命と性質において神とし、贖う神と贖われた人が共にミングリングされ、構成されて一つの実体、すなわち新エルサレムとなることのできるためです—3, 22 節。
- C. 新エルサレムは、神の選ばれ、贖われ、再生され、聖別され、更新され、造り変えられ、同形化され、栄光化されて、神となった人からなる構成です—ヨハネ 3:6, ヘブル 2:11, ローマ 12:2, 8:29-30：
1. わたしたちが神となるようにされることが意味するのは、わたしたちが手順を経て究極的に完成された三一の神で構成されて、命と性質において神となるようにされ、彼の団体の表現となって永遠に至るということです—啓 21:11。
2. 信者たちが神となることは神の有機的な救いの過程であり、この過程は新エルサレムにおいて究極的に完成します。これは最高の真理、最高の福音です—ローマ 5:10, 啓 3:12, 21:10-11。
- D. 聖書の初めには単数の神があり、終わりには大いなる団体の神、新エルサレム、すなわち団体の神・人があります。これは手順を経て究極的に完成された三一の神と、再生され、造り変えられ、栄光化された信者たちとの、拡大された、宇宙的な、神性と人性の合併です—創 1:1, 啓 21:3, 22, 22:17 前半。
- III. 今日、主のためのわたしたちの働きとその結果は、新エルサレムのビジョンによって支配され導かれるべきです。この唯一の都の記述の中で明らかにされていることは、わたしたちが何であるか、わたしたちがどのように働くかの規範であるべきで

す——3:12. 21:2, 9-23 :

- A. 新エルサレムは、諸地方召会におけるキリストのからだの有機的な建造の究極的完成です。地方召会は、神がキリストのからだの建造を完成する手続きであり、新エルサレムを建造するためです——I コリント 1:2. 12:12-13, 27. 啓 21:2 :
1. キリストのからだは、その生存と機能のために諸地方召会を必要とします——使徒 8:1. 13:1。
 2. 諸地方召会は、キリストの一つからだの多くの地方における多くの表現です——啓 1:4, 11。
 3. わたしたちは啓示録第 1 章で諸地方召会を見ますが、最後の二つの章ではただ一つの都を見るだけです——11 節. 21:2。
 4. 主の渴望は、諸地方召会の中でまずキリストの有機的なからだを建造して、新エルサレムを獲得することです——エペソ 4:16. 啓 21:2。
- B. 新エルサレムは宇宙的な金の燭台しょくたいです——18 節後半, 23 節 :
1. 新エルサレムは聖書における燭台の究極的な完成です——出 25:31-37. 列王上 7:49. ゼカリヤ 4:2. 啓 1:20. 21:18 後半, 23。
 2. 諸召会は金の燭台として、新エルサレムにおいて究極的に完成されます。新エルサレムはすべての燭台の集大成です——1:20. 21:18 後半, 23 :
 - a. 啓示録には二つの大きなしるしがあります。それは金の燭台のしるしと、新エルサレムのしるしです——1:1, 12, 20. 21:2, 10-11。
 - b. 啓示録はすべての燭台で始まり、唯一の燭台で終わっています——1:20. 21:18 後半, 23。
 - c. 燭台は諸召会のしるしですが、新エルサレムは神の永遠の住まいのしるしです——2-3, 22 節。
 3. 新エルサレム、金の山は、宇宙的な金の燭台であり、ともし火としての小羊を保持し、光としての神を輝かし出しています——18 節後半, 23 節. 22:1, 5。
- C. 新エルサレムは永遠のベテルです——創 28:10-22. 啓 21:3, 22 :
1. ヤコブの夢は神の目標の夢、ベテルの夢、神の家の夢でした (創 28:10-22)。この家は今日の召会であり (I テモテ 3:15)、それは神と彼の贖われた選びの民の永遠の住まいとして、新エルサレムにおいて究極的に完成します (啓 21:3, 22) :
 - a. 神には夢があり、その夢は新エルサレムを持つこと、すなわち建造された都を、彼のエコノミーの究極的完成として持つことでした——2 節。
 - b. わたしたちの夢は、神のエコノミーの究極的完成としての新エルサレムとなることです——9-10 節。
 2. キリストがベテルで天のはしごとなることにおいて、わたしたちに語っていることは、神がいかに、神の贖われ造り変えられた選びの民で構成された家を地上で持つことを渴望しているかということです。それは彼が天を地にもたらし、地を天に結び付けて、永遠に両者を一つにするためです——ヨハネ 1:51. 創 28:10-22。

3. 神の建造、神の家は、神と人の相互の住まいです。神の家は人であり、人の家は神です——イザヤ 66:1-2. I コリント 3:16. 詩 90:1. ヨハネ 15:5 前半. 14:23。
 4. 未来の永遠において、新エルサレムは全宇宙に立って、天に向かって引き上げられており、その上を御使いたちが上り下りして、天を地にもたらし、地を天に結び付けて、神と人の間の神聖な行き来、神聖な交わりを持たせます——II コリント 13:14。
- D. 新エルサレムは永遠のシオンの山、至聖所、神がおられる所です——啓 14:1-5, 21:1-3, 16. ヘブル 12:22 :
1. 召会時代に、成就され円熟した神・人はシオン、すなわち勝利者です——啓 14:1 :
 - a. 召会は天のエルサレムであり、勝利者はシオンの高嶺また顕著な部分です——ヘブル 12:22. 啓 14:1。
 - b. 勝利者はキリストのからだを建造して、新エルサレムを究極的に完成するためです——ローマ 12:4-5. エペソ 4:16. 啓 3:12。
 2. 新しい天と新しい地において、新エルサレム全体はシオンとなります。新エルサレム、永遠のシオンは至聖所、すなわち神がおられる所です——21:1-3, 16, 22。
- E. 新エルサレムは真の究極的に完成されたシュラムの女、すなわち団体のシュラムの女であり、神の選ばれ贖われたすべての人を含みます——雅 6:13. 啓 21:2, 9-10. 22:17 :
1. すばらしいシュラムの女は、ソロモンの複製であり、新エルサレムの最大で究極のしるしです——雅 6:13. 啓 21:2。
 2. ソロモンの配偶者として、シュラムの女は命、性質、かたちにおいてソロモンと同じになりました。それはエバがアダムに対してそうであったようにです——創 2:20-23 :
 - a. これが表徴するのは、キリストの愛する者が命、性質、かたちにおいて彼であるのと同じになり、彼にふさわしくなって結婚するということです——II コリント 3:18. ローマ 8:29. 啓 19:7. 21:2。
 - b. 大勢のキリストの愛する者は最終的に、神格においてではなく命と性質において神の複製となります。これは、神が人と成られたのは人が神となるためであるという、神聖な啓示の高嶺の成就です。
- IV. 「手順を経て究極的に完成された三一の神は、彼の願いの大いなる喜びにしたがって、彼のエコノミーにおける最高の目的のために、ご自身を彼の選ばれた人の中へと建造し、彼の選ばれた人をご自身の中へと建造しつつあります。それは彼がキリストの中で、神性と人性のミングリングとして構成体を持ち、それを彼の有機体またキリストのからだとならせ、彼の永遠の表現、また贖う神と贖われた人の相互の住まいとするためです。この宝のすばらしい構造の究極的な完成は新エルサレムであり、永遠に至ります」——ウイトネス・リーの墓の碑文。

務めからの抜粋：

神化^{かみ か}——神格においてではなく命と性質において神となる

これはわたしたちを神化の事柄にもたらしめます。それは、信者たちを神格においてではなく命と性質において神とするという神の意図です。アタナシウスは紀元 325 年のニケア会議の時に神化に言及し、「彼(キリスト)が人とされたのは、わたしたちが神とされるためである」と言いました。「神化」という用語は、多くの神学者とキリスト教の教師たちがよく知っている言葉ですが、過去十六世紀の期間、キリストにある信者たちの神化について教えた人はごく少数でした。

わたしは神化についてのいかなる教えによって影響を受けたことはありませんが、聖書の研究から、神は信者たちを神格においてではなく、命と性質において神とするのを意図しておられることを学びました。例えば、ヨハネの第一の手紙第 3 章 2 節は言います、「愛する者たちよ、今や、わたしたちは神の子供たちです。わたしたちがどのようになるかは、まだ明らかにされていません。彼が現れるなら、わたしたちは彼のようになることを知っています。なぜなら、わたしたちは、彼がそうであるように、彼を見るからです」。この節は、わたしたちが神のようになることをはっきりと啓示しています。

神がわたしたちを彼のようにするのは、彼の命と性質をわたしたちの中へと分け与えることによってです。ペテロの第二の手紙第 1 章 4 節は、わたしたちは「神聖な性質にあずかる者」となったと言います。ヨハネによる福音書第 1 章 12 節から 13 節は、わたしたちは神によって彼の命をもって生まれ、再生されたと言います。神の子供たちとして、わたしたちは「赤子の神」であり、神の命と性質を持っていますが、彼の神格を持っていません。神は礼拝されるべき唯一の方です。

わたしたちは神から生まれました。そして今日、神の命と性質を持っており、部分的に神のようです。ある日、彼が来られる時、わたしたちは全体的に完全に神のようになるでしょう。

ダビデが神の心になつた人であることはすばらしいのですが、不十分でした。神が欲しておられる人は、「わたしはただ神の心になう人ではありません。わたしは神格においてではなく命と性質において神です」と言うことができる人です。一方で、新約は、神格が唯一であること、神だけが神格を持っておられ、礼拝されるべきであると啓示しています。もう一方で、新約は、わたしたちキリストにある信者が神の命と性質を持っており、命と性質において神となりつつあるが、決して彼の神格を持つのではないことを啓示しています。(サムエル記上・下ライフスタディ、メッセージ 25)

新エルサレム——神性と人性がブレンディングされミングリングされて一つの实体となった構成

聖書の神聖な啓示の結論は、建造、すなわち新エルサレムです。この建造は、神性

と人性のブレンディングまたミングリングです。これは啓示録第21章における新エルサレムの記述によって証明されます。3節は、新エルサレムは「神の幕屋」であると言い、22節は、「わたしはその中に宮を見なかった。主なる神、全能者と小羊が、その宮だからである」と言います。神の幕屋としての新エルサレムは、神が住まわれるためであり、宮としての神と小羊は、贖われた聖徒たちが住むためです。これは、新エルサレムが、神と人の相互の住まいとなることを示します。さらに、この建造は人の構成です。門は真珠で、イスラエルの子たちの十二の部族の名が刻まれており(12節)、十二の土台の上には小羊の十二使徒の十二の名があります(14節)。これは、新エルサレムが、本質、中心、普遍性である三一の神と、神の贖われた民との構成であることを明確に示しています。

新エルサレムは、神性と人性がブレンディングされミングリングされて一つの実体となった構成です。すべての構成要素は、同じ命、性質、構造を持っており、こうしてそれは団体の人です。これは、神が人と成られ、人が神格においてではなく命と性質において神となるという事柄です。神と人、人と神、この両者は共にブレンディングされミングリングされることによって、共に建造されます。これが神の建造の完了、究極的完成です。わたしたちはみなこのビジョンを見る必要があります。(サムエル記上・下ライフスタディ、メッセージ30)

箱の中のダイヤモンド

もしこの極めて重要な点に注意を払わないで聖書を読むなら、非常に実際的な意味で、聖書はわたしたちにとって空虚な本になります。これは、聖書そのものは実際であっても、わたしたちの理解では聖書は空虚なものであることを意味します。例証として、実に魅力的で、大きなダイヤモンドが入った箱を想像してみましょう。子供はダイヤモンドではなく、箱に興味があるかもしれません。しかしながら、大人は、箱の中に入っているダイヤモンドに注意を集中するでしょう。今日、多くのクリスチャンは「箱」としての聖書に注意しますが、この箱の内容である「ダイヤモンド」を見たり評価したりしたことがなく、「箱」の中の「ダイヤモンド」を正しく評価する人を罪定めさえします。聖書という「箱」の中の「ダイヤモンド」とは、神がキリストにあって人と成られたのは、人が神格においてではなく命と性質において神となるためであるという啓示です。

今日のクリスチャンの大多数は、聖書の中の極めて重要な点を無視しています。それは、神がキリストにあって人と成られたのは、人が神格においてではなく命と性質において神となるためであること、また神はご自身を人とミングリングして、一つの実体となるのを願っておられるということです。ある人たちは、これを無視するだけでなく、それを教える者を異端として不当に非難しています。今日、多くの者は、この極めて重要な点の一面、すなわち神がイエスという名の人と成られたことを信じるだけで、もう一つの面、すなわち人が神格においてではなく命と性質において神となることは信じません。(サムエル記上・下ライフスタディ、メッセージ31)

光とともし火

都は太陽も月も必要としない

啓示録第 21 章 23 節は言います、「都の中では、太陽も月も輝く必要がない。神の栄光がそれを照らし、小羊がそのともし火だからである」。千年期で、太陽と月の光は強化されます(イザヤ 30:26)。しかし、新しい天と新しい地における新エルサレムでは、太陽も月も必要がありません。太陽と月は新しい天と新しい地にありますが、新エルサレムでは必要がありません。なぜなら、そこで神聖な光である神が、はるかに明るく輝くからです。

そこには夜はない

新エルサレムには夜がありません。なぜなら、「夜はもはやない」からです(啓 22:5 前半)。「そこには夜がない」(21:25 後半)。新しい天と新しい地には昼と夜の区別がありますが、新エルサレムにはそのような区別はありません。都の外には夜がありますが、都の内側には夜がありません。なぜなら、都には永遠の神聖な光、神ご自身がおられるからです。

神の栄光が神聖な命の光として都を照らし、小羊はともし火であって、 栄光としての透明な都を通して神聖な光を輝かし出す

啓示録第 21 章 11 節と 23 節は、新エルサレムは神の栄光を持っており、その光は最も尊い宝石のようであり、水晶のように透明な^{へきぎよく}碧玉のようであると告げています。新エルサレムにおいてキリストは、聖なる都のともし火として、光として内側で神をもって輝き、神の栄光、神聖な光の表現をもって都を照らします。「都の中では、太陽も月も輝く必要がない。神の栄光がそれを照らし、小羊がそのともし火だからである」(23 節)。神の栄光は、表現された神であり、新エルサレムを照らします。ですから、神の栄光は、神をその実質、本質、要素としてもち、新エルサレムの光であり、そのともし火としての小羊の中で輝きます。神の表現された栄光、あるいは表現された栄光の神は、新エルサレムの碧玉の城壁を通して、ともし火としてのキリストの中で輝く光です。碧玉の城壁は最も尊い宝石のようであり、命における豊かな神の外観を帯びています(11 節)。命における豊かな神の外観は、神の最終的な究極的に完成された現れにおける神の表現のための輝きを伴います。

第 21 章 23 節で、神が光であり、キリストがともし火であることを見ます。これは、神と小羊が一つの光であることを意味します。神は内容であり、小羊、キリストは光を帯びる方、表現です。これは、光である神が、ともし火としてのキリストの中で都全体を照らすことを意味します。これは神聖な分与の事柄です。なぜなら神聖な光の輝きは、実は手順を経た三一の神を信者の中へと分与することであるからです。

神である神聖な光は、ともし火を必要とします。小羊がともし火でなければ、神の輝きはわたしたちを殺すでしょう。しかしながら、ともし火としての贖うキリストを

もって、神聖な光はわたしたちを殺すのではなく、わたしたちを照らします。テモテへの第一の手紙第6章16節は、神は近づきたい光の中に住んでおられると言います。しかし、キリストの中で、神は近づけるようになります。キリストから離れて、神の輝きは殺すものとなりますが、キリストの中で神の輝きは照らしです。神聖な光は小羊、贖い主を通して輝くので、それは愛すべきもの、触れることができるものとなりました。ともし火としての小羊を通して、神の光は神の分与のために享受のある輝きとなります。(新約の結論(15)、メッセージ262)

贖うキリストの妻

新エルサレムは神の幕屋であるだけでなく、贖うキリストの妻でもあります。旧約と新約の両方で、神は彼の選びの民を、愛における彼の満足のための配偶者にたとえておられます(イザヤ54:6、エレミヤ3:1、エゼキエル16:8、ホセア2:19、IIコリント11:2、エペソ5:31-32)。贖うキリストの妻としての新エルサレムにおいて、神は愛における最も満ち満ちた満足を持たれます。

啓示録第21章9節後半と10節は言います、『『ここに来なさい、あなたに小羊の妻である花嫁を見せよう』。そして彼はわたしを霊の中で、大きな高い山へ連れて行き、聖なる都エルサレムが、天から出て神から下って来るのをわたしに見せた。花嫁はおもに婚姻の日のためですが、妻は全生涯のためです。新エルサレムは、千年期で一日としての千年の間(IIペテロ3:8)、花嫁であり、新しい天と新しい地では永遠に妻です。千年期における花嫁は勝利を得た聖徒たちを含むだけですが、新しい天と新しい地における妻は、すべての贖われ再生された神の子たちを含みます(啓21:7)。

エバがアダムと一になったように、新エルサレムは贖うキリストと一になります。エバは、アダムのわき腹から取り出されたあばら骨から建造され、アダムに連れ戻されて彼と一つの肉体、すなわち性質と命において彼と一になりました(創2:21-24、エペソ5:25-27、29-32)。原則は、贖うキリストの妻としての新エルサレムについても同じです。新エルサレムは、性質と命において贖い主と一になります。再びわたしたちは、新エルサレムは物質の都ではあり得ないことを見ます。なぜなら物質の都は、性質と命においてキリストと一になることはできないからです。新エルサレムは、神聖な要素がそれに加えられ、神の聖なる性質がその中へと造り込まれただけでなく、性質と命において贖うキリストと一になります。

召会をその縮図とする

贖うキリストの妻としての新エルサレムは、召会をその縮図とします。これはエペソ人への手紙第5章22節から32節におけるパウロの言葉によって啓示されており、そこで彼はキリストの配偶者としての召会について語っています。召会は実はキリストの一部です。なぜなら、召会はキリストから出て来てキリストへと至るからです。それは、エバがアダムから出て来て、アダムへと至ったようにです。

エペソ人への手紙第5章32節でパウロは言います、「この奥義は偉大です。実は、わたしはキリストと召会について言っているのです」。キリストと召会が一つ霊であるという事実は(1コリント6:17)、夫と妻が一つの肉体となることで予表されるように、偉大な奥義です。召会がキリストから出て来るキリストの配偶として、キリストと同じ命と性質を持ち、キリストと一であることは、確かに偉大な奥義です。

千年期においてキリストの花嫁となっている

新しい天と新しい地でキリストは妻を持ちますが、千年期では花嫁を持ち(啓19:7-8, 21:2)、それは勝利を得た信者たちから成ります。キリストは再来する時、勝利者たちと結婚します。この結婚は啓示録第19章7節から9節で記述されています。

啓示録第19章7節は言います、「わたしたちは喜び歓喜し、彼に栄光を帰そう。小羊の婚姻の時が来て、彼の妻は用意を整えたからである」。小羊の婚姻は、神の新約エコノミーの完成の結果です。新約における神のエコノミーとは、キリストの贖いと神聖な命を通して、彼のために花嫁、召会を得ることです。全世紀を通しての聖霊の絶え間のない働きによって、この目標はこの時代の終わりに完成されます。その時、勝利を得た信者たちから成る花嫁は用意されるでしょう。

啓示録第19章7節の「彼の妻」という言葉は召会(エペソ5:24-25、31-32)、キリストの花嫁(ヨハネ3:29)を指しています。しかしながら、啓示録第19章8節と9節によれば、千年期の間、キリストの妻、花嫁は勝利を得た信者だけから成っていますが、啓示録第21章2節で花嫁、妻は、千年期の後、すべての救われた聖徒たちから成っており、永遠に至ります。

啓示録第19章7節後半は、妻は「用意を整えた」と告げています。花嫁の用意は、勝利者の命における円熟と、彼らが団体の実体として共に建造されることにかかっています。ですから、勝利者は命において円熟するだけでなく、一人の花嫁として共に建造されるのです。

啓示録第19章8節は言います、「彼女は輝く清い細糸の亜麻布の衣を着ることを許された。その細糸の亜麻布の衣は、聖徒たちの義である」。ここの「清い」は性質を指しており、「輝く」は表現を指しています。義、あるいは義なる行ないは、わたしたちが救いのために受けた義(すなわちキリスト)、客観的であり、わたしたちを資格づけて義なる神の要求を満たす義を指しているではありません。啓示録第19章8節における勝利を得た信者の義は主観的であり、彼らが勝利を得たキリストの要求を満たすためです。ですから、細糸の亜麻布はわたしたちの勝利の命を示しています。それは、実はわたしたちが自分の存在から生かし出すキリストです。

すべての成就された聖徒たちから成る

究極的に、新しい天と新しい地で、贖うキリストの妻としての新エルサレムは、す

すべての成就された聖徒から成ります。千年期の後、すべての聖徒は成就され共に構成されて、新エルサレムというすばらしい実体になります。

キリストの配偶者としての召会の究極的完成は、新しい天と新しい地における新エルサレムであり、永遠に至ります。啓示録第 21 章 2 節は言います、「わたしはまた聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように整えられて、天から出て神から下って来るのを見た」。新エルサレムは、すべての世代にわたって神に贖われ成就されたすべての聖徒の生ける構成体です。これが、キリストの配偶者としてのキリストの花嫁、妻です。キリストの妻として、新エルサレムはキリストから出て来て彼の配偶者となります。彼女は、キリストの命と性質の豊富にあずかることによって用意されます。

啓示録第 22 章 17 節は、キリストと彼の妻としての新エルサレムが宇宙的な夫婦となって永遠に至ることを示します。その霊は、手順を経た三一の神の総合計であり、今や完全に円熟して花嫁となった信者たちと一になります。ですから、手順を経た三一の神の究極的完成と、神の選ばれ、贖われ、再生され、造り変えられた人たちの究極的完成は一になり、宇宙的な夫婦となって三一の神を表現し、永遠に至ります。(新約の結論 (15)、メッセージ 258)